

# 「信仰の成長」

～この世と神の国～

ヨハネ 18：28～41、ヨハネ 8：12～59

## ■ ヨハネによる福音書 11章 1-35節

「もしあなたが信じるならばあなたは神をみる」という想定がされています。人生において、いろいろな問題が目の前に起こります。

今日、お話ししたいマリヤとマルタのシーンをルカの10章を見ると最初のマルタが出てくるのです。イエス様が村に来て話をしている間、マリヤは座って聞いていたのです。ところが、一方のマルタは何とかもてなしをしようとして頑張っていたのです。すると、だんだんと腹が立ってきて怒ったのです。誰に起こったかというイエス様に怒ったのです。「イエス様、この子に少しは働きなさい。」と言ってくださいと怒ったのです。すると、イエス様はこう答えたのです。「彼女は正しいことを選んだのだ。正しいことは一つだけである。」マリヤは「なによ!」と思うのです。神様はマリヤの心とマルタの心に御言葉を伝えて作り変えていくのです。そして、今日読んだヨハネの11章に到達すると、なんとマルタが成長しているのです。「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。今でも私は知っております。あなたが神にお求めになることは何でも、神はあなたにお与えになります。」イエスは彼女に言われた。「あなたの兄弟はよみがえります。」マルタはイエスに言った。「私は、終わりの日のよみがえりの日のよみがえりの時に、彼がよみがえりを知っております。」イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはありません。このことを信じますか。」彼女はイエスに言った。27節、彼女の成長が見られます。「はい。主よ。私は、あなたが世に来られる神の子キリストである、と信じております。」彼女はここで3つの成長をしているのです。

## ■ 「はい」「生きているキリスト」 「知っている→信じます」

彼女の信仰は、ついこの間までは「頭の」信仰だったのです。頭では良くわかってはいるのですが行動が伴わないのです。なぜかという、わかっているのは「頭」だからです。イエス様は食事のもてなしをしてもらいに行っただけではありません。彼らに伝えたかったのです。自分が十字架に架かって死んで後、あなた方がどう生きるかを伝えなかったのです。最初にマリヤが救われてマルタが救われていったのです。だから、この場所は比較対象ではないのです。信仰の成長が起きていくのです。マリヤは成長していたり、マルタは成長していなかったのです。マルタに対して、「マリヤが大切なことを選んだのだ」と言われた後、どのような会話があったのか聖書には出ていません。イエス様の方法は不思議なことで、私たちに考えさせるのです。先に祝福を受けた人がどうなっていったかを考えてみてください。私たちの教会は反抗期から次の段階に進む時期です。自分で神様と向き合って戻る場所を通らなさいといけません。けれどもマルタはその反抗期を通して、イエス様に厳しめに怒られて、求めて願った言葉ではない言葉と言われて、おそらく暫く落ち込んだと思います。あなたもそうだと思いますが、その、落ち込んだ時間が大切なのです。私たちは思春期になると周りの目が気になります。誰が自分を見ているのか。どう評価しているのか。神様に頼るようになっていきます。信仰の成長がそこに起こっていったのです。

## ■ ライバル心

比較対象のマリヤに対して「あなたを呼んでおられます」とそっと言ったのです。彼女は変化して行っています。マルタは変わったのです。「配慮」したのです。「何で早く来てくれなかったのですか。」と怒っていませんでした。問題が起きたときに、自分に嫌なことが起こった時に信じようとしたのです。「私は、あなたが世に来られる神の子キリスト（メシア）である、と信じております。」イエス様を人として見ていて、神様だけ人として偉い人ぐらいに見ていました。だから、自分の思いを叶えてくれるイエスキリストがそうではなくなった。マリヤとマルタはイエス様が十字架に架かって復活すると理解

していったのです。マリヤとマルタの信仰は、十字架に向かっ

ていくたびに成長していったのです。ここまでの話は今の日本を見ていると良くわかることなのです。私たちが正しいと信じて行っていることで、あなたの人生は良くなったでしょうか。私たちは、今までのやり方で生きても上手くいかないことはわかっているのです。上手くいなくて嫌だから、神様を信じてみることにしてみたのです。赦すこと、自分が間違っていることを認めるといふ、聖書に書かれていることを行うことは難しいです。世の中は謝ったら負けという世界で行うのです。毎日が戦いです。しかし、そのような人生で神様はそれを成し遂げていく人々に恵みを与えると約束し、聖書の中の登場人物は、それで生き抜いた人と、途中でやめてしまった人と、最初からやらなかった人が出てくるのです。そして、生き抜いた人は祝福され、途中でやめてしまった人は後悔し、最初からやらなかった人は歯がしりしているのです。そこで、その人々を見るたびに、「やらなくてはいけない。」と思うのです。皆さんは認めているのです。これまでの自分のやり方から変わりたいと思っているのです。聖書には「もし信じるなら」と書いてあるのです。「もしあなたが信じるなら、あなたは神の栄光を見る」と書いてあるのです。教会はあなたの価値観を棄てようとした人が集まる場所なのです。神様は生涯をかけて本当に捨てたというまであなたと向き合います。いつもやらないといけないうので簡単なことが難しいのです。

## ■ マリヤの姿

すぐに言ってひれ伏して礼拝したのです。彼女は礼拝を捧げたのです。みなさんは礼拝をされていますか。あなたの生活の中で礼拝の時間はあるでしょうか。日曜日だけが礼拝ではありません。日曜日は安息の日です。あなたの一週間を振り返る日です。「イエス様は感謝をささげて後それをささぎ」とあったようにこれは礼拝なのです。礼拝は主従関係を認めることです。思春期を迎えた私たちが成人になるために大事なことは、あなたの上にあなたの主を置くということです。多くの人は自分が主人になっているのです。礼拝はあなたが主で、私は従います。という姿勢です。マルタはまだそこまで到達していなかったのですが、「はい。主よ。」というところまで行ったのです。この後、礼拝が始まります。祈りと賛美には決定がありません。祈りはお願い。賛美。聖書の中で最初に「安息日を覚え、これを聖なる日とせよ。」と書いてあるのです。それは、あなたが道を踏み外さないためです。そうすると判断を間違ってしまうのです。神様は不思議なお方で、御言葉を聴いていると思ひ出させてくれるのです。神様は一人一人に成長を与えてくださるのです。「もし信じるなら」です。しかし、信じるにはいくつかルールがあるのです。頭で信じてても意味がありません。頭から心に代わるためには、時々痛みが伴うことがあるのです。しかし、その時に神様の前に出てみてください。①思う通りにならない。②感情的になって起こりたくなる。③むかつく。神様にはかなわないと早く負けたほうが良いです。負けた後良くなるのです。見る目線が変わるのです。イエス様もわかってくれたのです。「イエスは涙をながされた」しかし、その霊の憤りというのは神様の心の葛藤でもあるのです。あなたを見ていて神様は痛みがあるのです。神様は先を見ているからわかるのですが、本当はこう伝えたいのが伝えられなくて辛いのです。だから、神様は「出て来なさい。」と言っているのです。神様の前に出て礼拝してみないと答えはわかりません。礼拝は神様との関係です。この関係の中で、「私はあなたについていきます。」という関係を保つというのが礼拝なのです。そうすると、アーメンと言えないことを「はい。主よ。」と言えようにマルタでさえなりました。この世の価値観をすてるプロセスがこの中に見られます。みなさんはどこを目指していきますか。私たちが見ている目線をこの朝変えないといけません。イエス様はそのようなあなたに意地でも寄り添おうと見えています。あなたが諦めなければです。ペテロも同じ目線で見えていました。しかし、ペテロは戻れたのです。それは、イエス様に礼拝しようとしたのです。この朝、是非皆さんの礼拝があなたの生活の中で回復されるように祈ります。

(要約者:澤口 建樹)

(2018年10月7日)